

---

# 病みつきシュテル

勳b

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

病みつきシユテル

### 【Nコード】

N0784BA

### 【作者名】

勲b

### 【あらすじ】

病みつきシリーズ第13弾！！

彼が帰宅すると、彼の家にある窓ガラスが割れていて

その家には、彼女が居座っていて

シュテル×オリ主です

(前書き)

この小説には

恋愛 40%

砂糖 40%

ヤンデレ 20%

が、含まれています

六課での仕事が終わり、家に帰宅する。

「……えっ？えっ！？」

久々に帰ってきたと思ったら、窓ガラスが割れていた。

空き巣か！？

管理局員の家に空き巣ですか！？

慌てて玄関を開け、家に入ると

「おかえりなさい」

淡々と、しかい何処か甘い声が聞こえた。

「ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ 私にしますか？」

そう言つと、彼女 シュテルは台所から出てきた。

……えっ？

「何でシュテルが居るの？」

「あなたが帰って来ると聞いたからです」

「いや、鍵は？」

「合鍵を貰い忘れてたため、窓ガラスから入りました」

空き巣だよ!?

それは犯罪だよ!!

シュテルは俺に手を差し出す。

「合鍵をください」

「あげないよ!？」

いきなり言いだすシュテルに応えると彼女は首を傾げる。

「何故ですか？」

私の言うことを聞けないんでしょうか。

恋人同士である私があなたの自宅の合鍵を貰っても何一つ可笑しいことはないじゃないですか。

むしろ、何故合鍵を渡してないんですか？

合鍵を貰わないと同棲出来ないじゃないですか」

しなくていいよ!？」

そう言ったらどうなるかわからないな。

「合鍵を渡すにも余ってないんだ。ごめんね」

俺が言うとシュテルは一瞬だけ俯くと直ぐに視線を俺に戻す。

「でしたら、あなたが持っている鍵を私にください。

私は何時もこの家に居るので大丈夫です。

あなたが何時何時帰ってきて私も私はこの家にいるから、あなたは鍵を持たなくても大丈夫です」

いや、大丈夫じゃ

シュテルは戸惑う俺から鍵を奪う。

「ですが、買い物に行ってる時がありますから、帰ってくるときは連絡してくださいね、あなた」

「……誰があなただ」

俺は溜め息を吐くと玄関の戸棚からスペアの鍵を取り出す。

「これ渡すから、こんなことしないでくれ」

まあ、シュテルになら渡してもいいだろ。

「ありがとうございます」

シュテルから鍵を返してもらいスペアの鍵を渡す。

「悪戯に使うなよ」

「使いませんよ。」

あなたの信頼を裏切るような真似はしません」

信頼……

まあ、信頼してるよ。

「それでは」と話を戻すシュテル。

「ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも」

妖艶な笑みを浮かべ、人差し指を口元に持っていていき、淡々と何処か甘い感じがする声で言う。

「私にしますか」

……何処でそんなの憶えたんだよ

「ご飯がいいな、シュテルの作った料理をたまには食べたいし」

「はい、わかりました」

嬉しそうな笑みを浮かべて応えるシュテル。

こつこつ所は素直に可愛いと思っただけだな

行き過ぎた行動さえしなければ、最高のなにな



シュテルは料理が上手い。

何処で教えてもらったのかは知らないけど、様々な料理を作れるし、どれも美味しい。

「どうぞ、召し上がってください」

そう言って並べられたのはオムライスだ。

「丁寧にケチャップでハートマークが書かれている。」

「それでは、いただきましょうか」

「ちよつと待て」

俺は何事もなく食べ始めようとするシュテルを止める。

「どうかしましたか？」

「もしかして、オムライスは嫌いでしたか？」

「いや、そうじゃなくて……」

「近すぎない……かな？」

シュテルは俺の隣に座っている。

それも、肩と肩が触れ合っているぐらいの近さだ。

「問題ありますか？」

「いや、問題っーか……」

気恥ずかしつか

「そんなことより、冷めないうちに食べましょう」

そう言って食べ始めるシュテルに続いて俺も食べ始める。

俺がスプーンで一口分すくうと、シュテルはスプーンを俺に差し出す。

「あーん」

……えっ？

「口を開けてくれないと食べさせれませんよ」

シュテルは不満そうに言う。  
いやいやいやいや！！

「自分で食べられるからね！」

「ですが、恋人として彼氏に食べさせてあげたいじゃないですか」

恋人じゃないからね！？

シュテルは俺の顔を見ると納得した表情を浮かべる。

「あなたの言いたいことがわかりました」

そう言っとう俺に差し出していたスプーンを引っ込め、食べ始める

シュテル。

……簡単に引き下がった？

まあ、いつか。

俺も冷めないうちに食べようかな。

「あなた」

「あなたって言う」

「

俺がシュテルの方を見ると同時に、彼女は俺にキスをした。

えっ

そのままシュテルは俺を押し倒すと口に何かを入れられる。

いわゆる、口移しという行為だ。

つつか、何で口移しなんて……！？

「ん、美味しいですか？」

俺から離れるとシュテルは無表情に聞いてくる。

「何で……こんなけと」

「あなたがあーんを拒んだからですよ。  
ですから、口移しをしました」

無表情に頬を赤らめながら言う。

「やはり気持ちを伝え会うより行動で示した方が幸せな気持ちになりますね。」

あなたとキスしたら、私が愛されてるんだと再確認しました。私もあなたを愛してますよ」

淡々としかし、何処か甘い声でシュテルは言った。

……シュテル？

「あなたも私を愛してますよね。  
私のことを愛してくれていますよね。」

あなたが機動六課に入隊してからは私と会う時間も少なくなりましたね。

そんなにも彼女達が大切ですか？  
それとも、私と居たくないだけですか」

居たくないなんて思ったことはない。

「私よりも彼女達を優先するのは何故でしょうか」

シュテルはスプーンを手にとるとオムライスを一口分すくい、口に入れる。

そして、また俺にキスをして口移しをする。

「……もつと

もつと私にあなたの愛を感じさせてください。

あなたが私を愛してくれていると実感させてください」

また、オムライスをすくうシュテル。

「シュテル」

なあ、シュテル

「何でしょうか」

何でお前は

「あーん」

俺が口を開けるとシュテルは首をかしげながら、オムライスを俺に食べさせる。

そして

「ッ!？」

シュテルに顔を近づかせ俺は彼女にキスをする。

「ん……ん!？」

そのまま口に含んでいたオムライスを彼女に口移しする。

全て移したら、俺は顔を離す。

「なあ、シュテル」

顔を真っ赤にしながら、俺を見るシュテル。

「なんでそんなに悲しそうな顔をしてるんだ」

常に無表情な彼女

でも、なんとなくだけど

彼女が悲しそうな顔をしてた気がした。  
いや、してたんだ

「……当たり前じゃないですか」

シュテルは俯きながら言う。

「あなたが私から離れていくのを嬉しく思えません」

彼女は立ち上がる。

「ですから、決めたんです」

……決めた？

「あなたを六課から           いえ、管理局から救うと」

真っ赤な顔をして、無表情で淡々としながら、何処か甘い声で

「私が

私だけがあなたを救える。

あなたの傍にいられる。

あなたの隣にいられる。

あなたの優しさに触れることができる。

私とあなた以外は邪魔です。

ですから、あなたを私以外の人が救います。  
だって私は

」

シュテルはデバイスを展開する。

何を

「私はあなたを愛してますから」

シュテルは言う。

デバイスである杖を此方に向けながら

最終通告のように

冷たい声で

次の瞬間、俺は意識を手放した

後日談というか、その後の生活

俺は六課を

……いや、管理局を辞めた

理由は簡単

“動けないから”

あの夜の日以来、俺はベッドの上で寝たきりの生活を過ごしている。

はじめは病院だったが、直ぐに彼女が俺を引き取った。

病院から退院した日以来、俺は彼女以外の他人を目にしてない。

俺の世話は彼女がしてくれている。

まるで当然のように

それが自分の義務のように

家のドアが開いた音がした。

あの日渡したスペアキーを使って開けたのだろう。

鼻歌が聞こえる。

淡々としながらも何処か甘い声で

助けて

そう叫ぶのはもう止めた。



無意味だから

俺の世界は彼女と俺だけ

俺の声を聞くのも彼女だけ

無意味なんだ

だから声に出すのはもう止めた

助けて

誰でもいいから

扉が開く

もう彼女しか利用しない扉を彼女が開ける。

助けて

(後書き)

こんにちはー 勦bでーす

新年早々に何やってんだろwww

前々からリクエストされていたシュテルのヤンd…… (ゲフンゲ  
フン

シュテルがヒロインの短編です

ん？ ヤンデレはどうしたか？

……

じ、次回から本気だす

それでは皆さん

あけましておめでとございますー！

今年もよろしく願いますー！

今年こそまともなヤンデレを書きたいwww

P S 新連載（番外編）として

病みつき語

を投稿しました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0784ba/>

---

病みつきシュテル

2012年1月1日21時46分発行